

雑誌『麒麟』に見る女性作家群像

二二〇

はじめに

日本による中国東北部の統治は、一九三三年の『満洲国』の建国によって、本格的に軌道に乗った。清朝のラストエンペラー溥儀を執政として担ぎ出して、『満洲国』という傀儡国家が創り出された。一九三四年に溥儀を皇帝にし、『満洲国』は帝制国家として、再スタートを切り、日本による統治は一層本格化した。中国では外来侵略による占領を『淪陥』とし、占領された地域を『淪陷区』と呼称する。

一方、建国後の『満洲国』は主導権を握った日本によって、国家建設を推し進め法律などが次々と作られていった。その狙いは明らかに植民地支配の地盤を固めるためだったと言える。

筆者は当時の文芸政策に注目しつつ、当時の東北部に発生した文学を検証したい。本論では、当時の『満洲文壇』で活躍していた女流作家に照準を合わせ、「女性の目を通じて表現された植民地社会は如何なるものなのか」、「植民地社会における文学の特異性は何なのか」などを検討課題にしたいと思う。

今回は大衆文学雑誌『麒麟』に登場した一群の女流作家を分析の中心にする。彼女たちが大衆に向けて発信した文学作品を含めたさまざまな日常生活、人生などに関する記事に絞り、大衆文学という角度から、文学の一現象を見ていきたい。

第一章 大衆通俗文学と雑誌『麒麟』

一、大衆通俗文学

文学は純文学の『雅』な側面を有しているとともに、大衆文学の『俗』な一面も存在している。中国の大衆文学は実に長い歴史をもっている。魏晋時代の志怪小説から始まり、唐宋時代に徐々に完成の域に近づきながら、明清時代にもっとも繁栄した。近代に入ってから、特に新文学運動^①後には、文学は常に進歩的な内容が求められた。大衆文学はこの文学革命の前で、やや衰退したかのように感じられる。しかし、近代以来の文学を見渡す限りでは、新文学が主流となりつつあるなかで、庶民にもっとも距離的に近い大衆文学は純文学とはまたひと味違った意味での生命力を有していた。

民国初期に中国の民族工業はにわかに繁栄し、その気運に乗じて鴛鴦蝴蝶・礼拝六派^②と言われる通俗文学のグループが登場した。そもそも文学には娯楽性を帯びる効能があるが、これまでは圧迫されてきていた。娯楽性というこの基本機能が、民国時代に入ってから、鴛鴦蝴蝶・礼拝六派によって十分に発揮されるようになり、人気を集めた。才子佳人の恋愛物語をモチーフにし、小市民的趣味に迎合したとされる。この派の文学は後に出現する五・四新文学運動時に激しい批判を浴びせられたものの、民国始めから新文学の出現までの間の文学の空白を埋め、清末の

李 青

文学気風を受け継ぐと同時に、後の新文学を導く役割を果たしたといえるよう。

五・四新文学の鴛鴦蝴蝶・礼拝六派に対する批判は、現代工業社会の特徴を表現する娯楽性と商業性とに集中している。鴛鴦蝴蝶・礼拝六派は伝統社会に対して否定的な態度を取り、一夫一妻制を賞賛し、モダンな愛情を賛美し、法律や労働による蓄財を謳歌した。けれども、現代労資関係には異論を唱えず、趣味は小市民的、一般家庭的で、プチブルジョアに近かった。後に出現する五・四新文学とは対照的である。五・四新文学が鴛鴦蝴蝶・礼拝六派を批判したことで、結果的に、純文学と大衆通俗文学の区分がはっきりと線引きされるようになったといえよう。

範伯群・孔慶東主編の『通俗文学十五講』^⑤のなかでは、純文学と大衆通俗文学について明晰な分析をしている。両氏によると、近現代における純文学と大衆文学はそれぞれ「知識エリート文学」と「大衆通俗文学」と称すべきだということであり、新文学から生まれた作品を「知識エリート文学」といふべきであると言っている。このように区分する理由は二つある。一つ目は新文学の各流派の作家はほとんどその時代のエリートであり、彼らは明確な人生観や文学観をもっており、自分が追い求めている文学に渾身の力を注いでいるからである。二番目は彼らの作品は中国のインテリ階級に広く読まれている。ところが、現代大衆通俗文学作家の場合は、一般的に都市の市民の立場から彼らの喜怒哀楽を描写し、市民大衆の趣味を自分の作品のカラーにしている。

「知識エリート文学」が探求性や前衛性を重視するのに対して、大衆通俗文学は深刻な政治問題の描写に長けておらず、常に民衆と同じ目線で人々の日常の移り変わりを描く。彼らの作品は往々にして、市民に娯楽を提供すると同時に、自分の作品を通じて自己鑑賞したり、鬱憤を吐き出したりする。大衆通俗文学の作家は人間の基本的な欲望をもつとも

重要視していると言えよう。また大衆通俗文学は時局に触れることがあるが、それはあくまでも人々の基本生活を通じての時局描写であり、人々の社会における日常生活や喜怒哀楽による感情描写に重点を置くのである。大衆通俗文学は情欲という人間の欲求をもって、社会小説や言情小説の基本を成立させたのであろう。

「知識エリート文学」は自己表現に長けており、主体性が強い。大衆通俗文学は読者にもっとも親近感があり、消費者（読者）の視野を考えた文学といえよう。また、大衆通俗文学はセールス性の強い文学であり、如何に発売の部数を伸ばすかを考え、読者の要望を聞き、読者が何を期待しているかを知った上で、創作する。発売後に読者の反応を大切に、市場の売れ行きに目を配り、読者のニーズに応えるように、次の題材を考えるのである。大衆通俗文学作家が追い求めている目標はある特定の人物ではなく、作品の「おもしろさ」がどれだけ読者に刺激を与えたのかを追求するのである。

一般的に大衆通俗文学には以下の特徴が見られる。まず、世俗に通じていること。二番目に、内容的に分かりやすいこと。三番目に、娯楽性が強いこと。あくまでも大衆通俗小説は俗社会の人々の平凡な生活に興を添えるものであり、言語は大衆に理解してもらわなければならない。娯楽の角度から言えば、市場の消費文学でもあり、おもしろさの上に、知識が得られ、読んで楽しいものでなければならない。

二、大衆通俗文学としての雑誌『麒麟』の誕生

淪陷区の大衆通俗文学については、これまでも数多くの卓越した論説がある。特に発祥地である上海を中心とした江南地域の大衆通俗文学は優れた有名な書き手が輩出された上、大流行していた理由もあり、常に研究対象となってきた。東北地方の大衆通俗文学を考察する場合にお

いては、地域の特異性を考えなければならぬと思われる。上に述べてきたような通俗文化の普遍性は共通しているという判断はできるとしても、地理的には五・四運動の発祥地の北京や資本主義が発達しており、外来文化に溢れている上海とは遠く離れている。次に、筆者が本論で特に注目したいのだが、淪陷後の状況においても、東北地方には傀儡政権が作られ、^①「国家」として機能しており、文芸政策などは他の淪陷区とは異質な様相を呈していたはずであろう。

雑誌『麒麟』はちょうど『芸文指導要綱』^②が頒布された直後に創刊している。『芸文指導要綱』の頒布によって、文壇に対する締め付けが一段と厳しくなったと見られている。当局の文芸路線はよりいっそう具体化され、「満洲国」内にある文芸団体や文筆活動に従事している個人までを網羅し、当局の監視下に置くという体制を取ったからである。

雑誌『麒麟』の特殊性から見ても、創作における自由度を容易に想像することができよう。雑誌は一九四二年六月に「満洲国雑誌社」から「勢いよく」、創刊されたのである。「勢いよく」というのは以下に述べる事情による。発行元の「満洲国雑誌社」は国家権力機関と強いパイプを持つており、いわゆる「政府」公認の雑誌であることがわかる。「満洲国雑誌社」の背景を調べても分かるのであるが、日本の大手出版社である「大陸講談社」の「満洲」分社にあたる。豊富な資金源に支えられている上、国家代弁者としての権力も絶大だといえよう。当然ながら為政者のために、国策宣伝に、雑誌が一翼を担っていることは明白であろう。だが、雑誌の内容は政治ばかりではない。人を楽しませる娯楽などの内容が圧倒的な分量を占めている。「大衆娯楽雑誌」としての位置づけを裏付けるために、まず発刊の辞を見てみよう。

『麒麟』は四千万人の民衆が情操を培うために発行したものである。

この信念は朝野各位の賛同を集めることによって、われわれの自信がいつそう強くなった。国民の皆さんは『麒麟』を自分たちの雑誌だと思ってくださいと確信している。われわれは諸賢の知恵を借りて、すべての労力に貢献し、雑誌を立派に運営したいと考えている。この雑誌を読めば、精神が慰められ、情操が向上する、人々に尊敬される国民になれるだろう。われわれはそれを心より期待している。

この発刊の辞から編集上の思惑を垣間見ることができる。『麒麟』は、全国民の「情操を培う」ために発刊したものであり、国民の雑誌であることを強調していた。『麒麟』が果たす目的はつまり、「この雑誌を読めば、精神が慰められ、情操が向上する、人々に尊敬される国民になる」ところにあるように感じられる。四千万人の民衆が情操を培い、国民に受け入れられる雑誌を作っていくこと、これが逆に言えば編集者に与えられた重責といえよう。厳しい政治情勢の下で、与えられた政治宣伝以外になるべく政治を語らず、全国民の趣味を汲み取りながら、密かに政治環境を離れて通俗文学に傾倒させようとする意図の存在を、容易に理解できる。

当時の「満洲国」の知的状況から考える場合は、まず第一に、市民レベルにおいては、漢文体の文言文を理解できる人は少なく、五・四新文化運動後に流行し出した「白話文」の分かりやすさに親しみを持つ人が多く、少々読み書きできる大衆層にとつては、読者は集まりやすかった。二番目に、淪陷区という特殊な環境は大衆通俗文学の流行を促進したといえよう。雑誌の通俗大衆性は創刊号の「編輯後記」からも強く感じられる。

我々は再三表明した。本雑誌は民衆を慰安し、国民の情操を培うた

めに創刊したのである。今日雑誌の内容は読者の目に触れることによって、本雑誌の使命をより一層理解していただけたことと思う。

(中略)

より多くの読者の要望に適應するために、もつとも通俗的な言葉を用いて、内容的には興味盛りだくさんとなるように、我々は幾度も内容を変更した。これは本雑誌における一貫した方針である。よって、発刊の初志に呼応しうると思う。

雑誌『麒麟』はその創刊の辞と編輯後記から商業性のニュアンスが感じられた。すべての国民に楽しく、面白く読んでもらうには、大衆性に興をさかすことに工夫をするはずだ。そのために編集者はどのような方針を建てたのだろうか。筆者は女性読者を視野に入れ、女性記者や女流作家を大量に起用することが雑誌『麒麟』の一大特徴ではないかと思っている。編集サイドとして、時代のニーズに合わせて女性問題を巧みにキャッチした。彼女たちは女性の目を通じて、「満洲国」に生活する自分たちの日常、生活における関心事、悩み、悲しみを描いた。以下、この部分に焦点を当てながら、具体的に見ていきたい。

第二章 『麒麟』に寄稿する女性たちと作品の多様性

一、『麒麟』に登場する女性文筆者の顔ぶれ

雑誌『麒麟』の表紙は、創刊号と一九四五年二、三月合併号を除き、美女で飾られることがほとんどだった。『麒麟』は幅広く各階層の読者を獲得するために、表紙ばかりでなく挿絵にも「満洲国」で活躍している女優の写真などを登場させている。視覚からまず読者に強い印象を与

え、親しみやすいイメージを演出していたわけである。内容を見ても、女性に関する記事が多い上、取材陣や執筆者までも女性が多いことに気付く。

雑誌は女性のために、三本の特集を組んだ。『秋之花―全国女性文筆人特輯』（一九四一年第一巻第四期 九月号）、『女性作家掌篇特輯』（一九四二年第二巻第一〇期 一〇月号）、『女性新人創作展・決戦掌篇』（一九四五年第五巻一月号）の三本である。『麒麟』は女性のために多くの記事を掲載した。若い女性に身近に感じられる、〃生活の知恵〃、〃児童生活〃、〃育児の話題〃や〃ミスとしての心構え〃、〃夫婦関係〃など、さまざまな話題で女性の関心を集めようとしていた。女性に関する記事がその月の特色になっているものもある。例えば、第一巻第四期には記者の取材によってまとめられた記事がある。『新婚夫婦訪問記』、『老媽店の素描』、『妻はどのように夫を支えるか』があり、寄稿されたものには『独身小姐の生活探偵記』、『水の都出身小姐の新婚訪問記』がある。これらの記事が掲載されたことに対して、編集後記にはわざわざ説明までがつけ加えられた。「紹介に値する婦女・家庭の読み物には、どのように家庭を和やかにするか、女性はどうのように夫を支えるかがある。ほかに、特別要請に応じてくださった鳥小姐が書かれた独身女性の探偵記、水の都出身の名才媛蕭小姐の結婚手記などがある。これらはいずれも本号の特色といえるだろう。」

ではまず、創刊号の内容から見ていきたいと思う。目次に掲載された記事は全部で四三編あり、女性に関する記事が一一編あった。紙面の三分の一を占めている。それは次の通りである。

☆麒麟画報にある写真 「発明與女性美」（発明と女性の美しさ）

☆民謡 「姑娘十想」（娘が想う十人）

☆隣組與主婦（隣組と主婦）

☆職業上心得與感想（仕事の心得と感想）

☆職業女性的自述（キャリアアウーマンの告白）

☆欧美的結婚礼節（欧米における結婚式の礼節）

☆怎樣对待晚帰の丈夫（帰宅の遅い夫への対処法）

☆国都文化陣線的女性訪問（国都の文化戦線で活躍している女性へのインタビュー）

☆幾種旗袍的製法（チャイナドレスの幾つかの作り方）

☆処女吻的価値（処女のキスの価値）

☆少女的心（少女の心）

内容は長めの記事やインタビューもあれば、短くてほんの半頁の詩もあった。しかし、女性読者を獲得するために、これだけバラエティーに富んだ分量の記事を用意した編集者の腐心は伝わってくる。このように女性に関する内容に関心を寄せてもらうためには、女性の人材が必要だった。女性記者の養成が必要だったり、女性作家を集めなければならなかった。「満洲国」時代の雑誌から見れば、『麒麟』ほど女性の文筆者を多く登場させた雑誌は類を見ないであろう。主な著者には呉瑛、梅娘、楊絮、左蒂、但娣、璇玲、瀾光、銀燕、乞女、鄂嵐、乙梅、北黛、羽倩、柳憶、白萍、佩珠、冬屹、蕭黛などがいた。『麒麟』発刊初期において、記事の掲載に張秀梅をはじめとする女性記者の活躍も目立つ。

上記のメンバーに当時「満洲文壇」ですでに頭角を現していた呉瑛、梅娘、楊絮、但娣がいる。『麒麟』に処女作を発表し、文壇デビューした左蒂もいる。彼女らは後に内外に知られる「満洲文壇」の寵児になった。

楊絮は『麒麟』のレギュラー投稿者の一人である。彼女は非常に多彩

な一面を見せていた。散文や小説を多く投稿していた。作風は哀切で美しい。特に勇氣をもって、大胆に自らの私生活を暴露し、「満洲文壇」にいる作家や詩人を偽名で登場させる『一地書』（一九四三年第三卷五期）を発表したことが文壇で大きな話題となった。彼女は歌手業をすると同時に、『国民画報』の編集長としても、活躍していた。彼女の一手一投足は常に「麒麟電台」（『麒麟』にあるコラム）のニュースになり、彼女の結婚式までも『麒麟』雑誌上で全過程生中継されるほどであった。呉瑛は「満洲文壇」では代表的な女流作家の一人である。大同報記者を経て、国通社と雑誌『斯民』（一九三五年～一九四一年）などの編集者を歴任した経歴をもつ。精力的に多くの文学作品を発表した。作品集の『両極』（一九三九年）は第一回目の文選賞を受賞し、作品「墟園」（一九四三年）は藝文社文学賞を受けた。雑誌『麒麟』の誌面においては、インタビューを受け、自分の理想を語ったり、作品を発表したりして、積極的に参与した一面を見せた。

左蒂も注目し値する一人である。夫の梁山丁とともに、新文学に早くから接近していた。散文や小説はともに得意であり、『麒麟』に発表した「柳琦」は文壇での基礎を定め、一躍注目されるようになった。

瀾光、乞女、銀燕、鄂嵐、但娣なども詩歌や短編小説を発表した。蕭黛は女性の日常生活におけるさまざまな話題を提供していた。

『麒麟』前期段階において、女性記者の張秀梅の取材による記事が多かった。やや堅苦しい政治的なインタビューもあれば、主婦の生活ぶりや女性の有名人の訪問記などもあった。彼女の記事を通じて、当時の女性の生活を理解するには、役立つことになった。

二、作品の多様性

『麒麟』に掲載された女性作家の作品は全般的に平明で分かりやすい。

少ししか文字が読めない女性であっても、実生活に纏わる話題が多いため、興味が持てるし、取っつきやすい。彼女たちの旺盛な創作は、通俗文学という手法を用いたからであろう。作品の様式と内容は実に多岐にわたる。植民地社会であるのに、これだけスケールの大きい創作を展開できたのは何故なのか。恐らく作品全体に見られるある一つの特徴に原因を求められるだろう。それは、「社会や時代背景」を乖離することではなからうか。『麒麟』に寄稿する呉瑛は女流作家の特徴を断言している。「隠さずに告白すれば、それはここでは〔満洲国〕時代を指す―筆者注〕時代背景を指摘しないことである。社会または経済はここまで変わってしまったても、彼女たちの創作態度は一向に変わることがない。これこそが女性作家の共通感覚である」と。さらに『麒麟』に発表した、「浮沈的心語」（一九四二年第二巻四期）では、文学活動をする思いを次のように綴っている。

文学を实践するようになってから、ある種の苦悶に陥ってしまった。これは私の精神が外部からきた圧迫と、内心からの欲望に対する防御ができないことからたらされた苦悶である。ここからまた精神的な苦痛が生まれたのである。しかし、私は文学活動に没頭すること、この苦しみを和らげたい。

政治と一線を画せば、時局や文芸政策に違反することが極力避けられ、厳しい検閲にひっかかるリスクが小さいと考えられる。女性の持つ独特な感受性による創作はそもそも、どことなく曖昧さを帯びており、読者の心を比較的に捕らえやすい面がある。雑誌経営は頭ごなしに国策で押さえつけられていたが、反面、利益の追求は最大の死活問題だった。

彼女たちの作品からは政治的な要素が極めて少なかったのである。こ

れは五・四新文学の価値観に反しており、時代を逸脱し、文学のリアリティを弱める恐れがある。中国では「文は道を載する所以なり」（文所以載道）という伝統が何千年も延々と受け継がれてきた。つまり、文章を書くには、思想や道理を明確に示さなければならないという意味合いである。政治的な問題を扱わないという姿勢は明らかに伝統精神に反している。政治を語らない、政治話題を避ける、という創作原則を貫くには、相当な勇気が必要であろう。しかしながら、文学現象は複雑なものであり、淪陷区の女性文学を語るときに、彼女たちが置かれた生活環境と社会環境から考えなければならぬ。特殊な環境に置かれた彼女たちの創作は主題選びや言葉遣いからも、独特な審美意識が表れるはずである。この独特性は戦争による被占領または植民地という現況からもたらされたものであり、当然作家の体験、心理、思考などの要素にも影響を及ぼしていると思われる。

第三章 作品からみる「満洲国」の諸相

一、短編小説

『麒麟』は当時「満洲文壇」ですでに名をなした女流作家や書く意欲のある新人女性に発表の場を提供してくれた。政府関係部門の出資で立ち上げた『麒麟』は国策の宣伝を請け負うかたわら、経営上採算がとれることも重要な条件の一つであったことは、すでに発刊の辞を分析した第一章で確認済みである。女性解放を主張しはじめてまもないこの時代に、女性の筆から描かれた世界はさぞかし読者の興味を惹いたことだろう。

『麒麟』に登場した女性ライターのはほとんどは女学校を卒業しており、

中には留学経験者もいた。彼女たちは近代的教育を受けた、いわゆる新時代のエリートである。無論、五・四新文化運動の息吹に触れたはずである。また、地理的に考えた場合には、東北地方は近代に入ってから、日本勢力が日増しに進出してきており、特に淪陷後に、文化的に日本の影響も強かった。男女平等などまだほど遠い四〇年代に、彼女たちの社会における活躍ぶりを見て、実に驚くことばかりであったことだろう。

まずは、『麒麟』に登場する頻度のもっとも多い楊絮をはじめとする女性たちの短編小説を中心に見ていきたい。

楊絮の小説には民国時代初期に流行する哀情小説が数多く登場している。

「浜辺の夢」（原題「海濱的夢」一九四一年 第一卷第二期）は最初に書いた哀情短編である。二六歳の愛雲は年の離れた五〇代の夫と裕福な暮らしをしている。愛雲は家庭の貧しさ故、一八歳で高校を中退して、今の夫の後妻になった。夫の優しさも彼女にこの結婚生活を満足に感じさせることができない。ある日、三〇代の画家の振光が現れることによって、愛雲の退屈な結婚生活に転機が訪れた。愛雲に見れば、振光はまさに才気と青春が溢れんばかりの人物であり、しばらく忘れ去られていた青春のときめきを喚起させた。一方振光の方も愛雲を見た瞬間に、二年前に亡くなった恋人に酷似し、何か魂を震撼させるものを感じさせられた。若い二人はたちまち許されぬ恋に陥ってしまった。一夏が終わった頃に、愛雲が振光の子供を身籠もってしまった。駆け落ちを企てたが、失敗に終わり、振光だけが去ってしまった。振光の子供を出産した愛雲の元に、振光が異境で病死した知らせが寄せられてきた。

まさに不倫を大胆に描写した一篇である。

哀情実話『雪夜』（一九四二年第二卷第九期）では、二三歳の莉は美しい山村の女学校を出ているところから、彼女の身の上に起こった不幸を

書き始める。莉は在学中スポーツ万能で、短距離走で三回連続で優勝した。同じくスポーツ好きで豪快なハンサムな楓と恋に陥り、同棲生活を始めた。しかし、二年目に楓は彼女に別れも告げずに姿を暗ましてしまった。

この突然の打撃に打ちのめされた莉はついに入院してしまった。しかし、傍らには莉より三歳年下の白輝が莉のことを片思いし、苦しんでいる。莉は彼の愛情に感謝するが、受け入れなかった。ついに、白輝は莉が自分の愛を受け入れてくれないことに苦しめられ、憂鬱のうちに、この世を去ってしまった。すべての愛を失ったことに気付いた莉はただ白輝の墓の前で泣き崩れるだけであった。

上記の小説を発表した翌月の号（一九四二年第二卷第一〇期）に「巡り逢い、再び」（原題「相逢心相旧」）を浪漫掌篇として発表した。志を胸に抱いた青年カップルが旧社会の因習に引き裂かれた悲劇の話であった。恋人同士の間で静芳と静芳。一年先輩の懷仁は卒業後に抱負を実現するために、静芳への恋を心に秘めながら、年老いた母親の待つ田舎の小学校に赴任した。しかし、理想は現実との間にあまりにもかけ離れ、懷仁を待っていたのは母親が用意してくれた結婚だった。静芳への愛と親の命令への服従と孝行の間に苦しんでいた懷仁はついに母親に屈してしまった。傷心した静芳は彼のことを忘れるために医者をめざし、勉強に没頭するようになった。立派な医者になった静芳の前に、ある日、肺結核を患う生気のない懷仁が患者として、偶然に現れた。思わぬところで巡り会えた二人は在りし日の相手のことを思い出し、悲しみが込み上げてきた。

楊絮の哀情小説の特徴はいずれも新時代の知識人女性を主人公にして、彼女をめぐる展開された恋愛物語である。五・四運動後に伝統と現実が相剋する中で道徳的価値観や婚姻観は大きく揺れはじめていた。思想的に新しい時代の潮流に迎合しようと、知識人の彼女らは伝統の三

従四徳に大胆に挑戦してみるが、多くは伝統に打ち勝つことができず、悲劇的な時代の犠牲者になってしまう。

範煙橋は民国哀情小説についてこう見ている。

民国初期に言情小説が流行していた背景は辛亥革命後にこれまでの「父母の命、媒酌の言」という伝統的な婚姻制度がぐらつき始めたところに原因がある。家柄や身分のつれ合いに新たな概念が生まれた。才子佳人を描写するには、新しい手法で対応しなければならぬ。ある者は婚姻の自由を求める勇気ができたが、環境や情勢の制約を受け、なかなか叶えることができない。異性間の恋愛問題を上手く解決できずに、彼らは非常に苦悶する。現実と社会の需要によって、小説の作者は哀情の描写に傾倒し、読者の共鳴を得るのである。^⑥

左蒂の処女作『柳琦』（一九四二年第二巻第一〇期）もなかなかの佳作である。

「私」という第一人称で女学生の琦の運命を描いた作品である。琦は友人の「私」に「私だって結婚を考えたことがあるわ。でも、あれは所詮女にとっては墓場なのよ。私、運命と闘ってみせるわ」と胸を張って言っていたが、やがて恋をして、振られることになった。琦の実家は実に奇怪な家庭だった。父親は鴉片中毒している母親にかまわずに、妾を同居させている。琦自身も年の離れた男に付きまとわれている。自分の置かれているこの環境と肉薄しながら、何とか抜け出そうとするが、運命のいたずらで、彼女はどんどん暗闇のなかに引きずり込まれてしまう。ついに彼女は自ら姿を暗ましてしまった。最後に彼女は「私」に宛てた手紙では「どんなところに流浪しても、生活においては、ひとかけらの

安らぎを見つけることができないわ。息苦しい！この男性中心の社会では女性には何の活路もないことがよく分かったわ！」と書いた。

五・四運動後に社会が大きく変動しつつある状況の中で、男尊女卑は依然として伝統の桎梏から抜け出そうとする知識人女性を圧迫していた。家の犠牲になり、学校を中退していた琦、父親の妻妾同居の婚姻、女性らしく生きようと目覚め、「運命と闘ってみせる」と言い放った琦まで男性に弄ばれ、結局、男性中心の社会から自分の居場所を見つけることができず、「女性には何の活路もない」と悲痛な叫びが聞こえてくる。社会の悪弊をするどくえぐり出している一作ではなからうか。

同時代の仲間呉瑛は左蒂の『柳琦』を高く評価をしている。

左蒂の短編「柳琦」（『麒麟』女流特輯に発表された）を、私は読んで、これは作者が力を入れた作品だと思った。彼女の老練な筆鋒下に、若い女性の生の苦悶が描かれている。生きるために圧迫を被っている苦い女柳琦は、最後には一切の理想を棄て彼女に全くふさわしくない男と取引せざるを得ず、と言って情感の要求に抗うことも出来ず、彼女は別な男を知る。小説中の主人公はこの理想と生を求むることの矛盾の中に、もがいてももがききれぬ情緒を極度に表現した。確かにこれは頗る深刻な描写の作品である。^⑦

呉瑛は『麒麟』に発表した作品は少ないものの、さまざまな形をもって、雑誌誌面で活躍した。同じく一九四二年第二巻第一〇期の女作家掌篇特輯に載った呉瑛の哀艶小説『欲』は好評を博した。ストーリーはある知識人女性の目を通じて伝えたものである。ある貧しい再婚同士。女は連れ子の女兒と嫁いできた。しかし、彼女は男に触られるのを嫌がり、以来、日々夫から暴言を吐かれ、ひどい仕打ちを受けるようになった。

近所の女性たちはこの事態に一樣に「女性は男性を喜ばせなければ、何の使い道があるのか」と思っている。夫を満足させることができず、虐待を受ける再婚女性はその鬱憤を娘に転嫁してしまう。呉瑛はここで性の問題を提起したと同時に、当時の社会において自分たちが置かれている立場と社会的地位に対する不理解をも指摘している。女性解放の道の方がまだ長いことを示唆している。

呉瑛の作品は女性特有の感受性をもって、常に各階級の女性の喜怒哀楽を描く。社会の矛盾や弊害は彼女たちの境遇を通じて暴露する。第三卷第八期（一九四三年）に呉瑛への訪問記がある。表面上では、呉瑛は衣食満ち足りる、不自由のない生活を送っているように感じられる。しかし、同時代の顧盈は呉瑛の心は必ずしも穏やではないと見ている。「あのような平穩の生活を保つことが不可能だ。作家（呉瑛を指す一筆者注）はたとえ温室にいても、この多彩な変化に富む時代と完全に分け離れることはできないだろう。われわれは作者（呉瑛を指す一筆者注）からの私鳴咽している」の台詞が聞こえてきた」と顧盈は分析している。

四二年の女作家掌篇特輯に載った鄂嵐の『幻想曲』も注目に値する。恋人同士の雲生と亜琳とは事情で結婚ができなかった。後に亜琳は民と結婚し、幸せに暮らしていた。ある日、曾ての恋人だった雲生が亜琳の元を尋ねてきた。幸せそうな亜琳とは民を見て、雲生が去っていく。短い文章に三角関係を比較的に上手く書いたように思う。

二、日常生活の記事、詩、散文

短編小説のほかには、日常生活の記事、手記、散文、詩などが多く見られる。

一般記事においては主婦の好みや職業女性の関心事にそれぞれ気配っているようである。

日常生活の記事では女性のニーズに合わせるように、時代の変化を意識していた。創刊号に国策宣伝を念頭に置いての記事「国都文化陣線の女性訪問記」のほかに、主婦に「帰宅の遅い夫への対処法」という良妻賢母を説く記事がある。一方、職業をもっている女性たちに働く経験を語る「職業女性たちの話を聞く」も掲載されている。まさに、バランスの良い記事の配置であろう。

新人女性作家たちは文学創作の余興で、女性読者が喜ばれるだろうと思われる気軽なテーマを書く。「私の春期化粧法」（一九四二年第二卷四期）を書いた蕭黛、「漬け物の作り方」（一九四二年第二卷一〇期）を紹介した瀾光……他にも女性たちに親しみを持たせる話題が每期盛りだくさんなのであった。

編集部は女性たちのために、工夫していることが分かる。「教養子女座談会」（一九四二年第二卷四期）、「婦女家庭」（一九四一年第一卷六期）のようなコラムを作り、洋服の色が如何にコーディネートするか、野菜の保存法や家計の常識などの生活における基本的な知恵を紹介している。

他に詩や散文が多く見られる。最初に女性の特集として組まれたのが『秋之花——全国女性文筆人特輯』（一九四一年第一卷第四期 九月号）である。中に散文は二編ある。楊絮の「早秋の寂寞」は夏が過ぎ去ろうとして、秋がやってくる乙女心の寂しさを繊細な筆致で書いている。もう一編は同じく秋を題材にした乞女の「秋はあなたのもの」である。他にそろそろ秋がやってくる時の気持ちを書いた詩が二編ある。それは楊絮の「乱れた感情」と瀾光の「情緒」である。北京を訪れ、古都の風景を感嘆する銀燕の詩「古都の知音へ」がある。この特輯に掲載されたどの作品も初々しさが感じられ、女性特有な繊細さに描写の細やかさが加わり、あたかも泉からさらさらと流れてきた水のようなようである。もう一つ大型特輯「四月抒情譜 特輯二」（一九四二年第二卷 第四期）がある。参加者は女

性作家の作品が多く見られる。呉瑛の散文「浮沈的心語」は文学に対する思いと困惑を綴った。同じく散文に楊絮の「小屋からの声」と左蒂の「ある灰色の夢」がある。春の訪れにもかかわらず、人生の不遇などを書いている。詩には璇玲の「四月の藤」と瀾光の「春の歌」がある。但姉は満洲文壇ではすでに名を馳せた女流作家の一人であるが、『麒麟』に発表した作品は極めて少なかった。第三卷第十期（一九四三年）の「秋之吟」の特輯には但姉が「暮年」を発表した。ある年老いた盲女が秋の森を散策しながら、感じ取ったことを書いた詩である。淡い寂寞のなかに耽美的な傾向が感じられる。

三、国策に利用された作品

一九四五年に入ると、日本の敗戦色がじわじわと濃くなり、第五卷第一期と二期を見ると、当時の「満洲国」の困窮状態が現れている。まず、頁数から見れば、創刊号の全一七九頁から（以後の号もだいたい一八〇頁前後を維持していた）六六頁まで一気に減少した。第二に、内容は娯楽がほぼ消えてしまう状態であり、政府の呼びかけに応じる形になった決戦一色の内容になった。女性の作品からもついに火薬の匂いがするようになってしまった。

終巻号（第五卷第二期。一九四五年四月号があるらしいが、筆者は確認していない）より一つ前の第五卷第一期に女性作家のために決戦掌篇「女性新人創作展」を企画した。これが女性作家による最後の作品になるとは誰も予測しなかったのだろうか。ここで「満洲国」に利用された若い女性新人たちの作品を簡単に見てみよう。

作品は梅乙の『鑿』、北黛の『曙』、倩羽の『収獲』、柳憶の『勝利の微笑』の四編である。これまでにこの四人は雑誌では生活や趣味、詩などを発表し、名前はある程度知られていた。

上記の四編のなかでは梅乙の『鑿』だけが辛うじて大東亜戦争を擁護するお決まりの文句が見あたらない。

医大三年生の羽鶯は裕福な而頤と結婚するためにやむを得ず中退した。四歳になる娘にも恵まれ、何一つ不自由な暮らしを送っている。しかし、羽鶯は学業を続け、きちつと卒業してから患者の病を治す夢を棄てていなかった。夫に打ち明けると、帰ってきた答えが「俺が帰宅したら、まっすぐに向いて微笑みながら夫の帰りを待っているお前が見たい。女はこれぐらいやってくれりゃ十分だ。お前は大学に三年間通ったが、家庭生活では何という原理、定義などを使ったというのか?」と頭ごなしの反対だった。

ストーリーの展開は五・四新文学運動後によくあったパターンであり、社会進出しようとする女性が古い因習に阻まれる。新と旧との葛藤が如実に現れている。

北黛の『曙』は国策にぴったりに合致した一編だと言えよう。裕福な家庭の小英は、国民学校に四年間通った後に、家庭内で刺繍などをして、花嫁修業をしてきた一八歳の箱入り娘である。しかし、村の協和会が女子青年団を立ち上げた後に彼女の日常生活を乱した。心の葛藤の末、ついに閨房を出て、女子青年団に入団することを決心した。作品の中では、小英の考え方の変化が急に変わる書き方としては、強引さが感じられる。彼女は突如として、「健全な国家には健全な国民が必要だ。健全な国民があったからこそ、健全な母親が生まれる」、「女の仕事はただ家庭でお裁縫するばかりではなく、他にすべきことがある。それは増産活動に従事することだ。これが国家に貢献する仕事だ」などと思うようになった。明らかに著者が国策に相応しい言動を小英という登場人物に托したに間違いないだろう。

倩羽の『収獲』は大東亜思想が日常生活に入り込む形で物語展開して

いる。良い教育を受けた鳳は妻子のいる会社の同僚安舒已と恋に陥り、同棲生活をはじめ。鳳の質素な暮らしに不満を漏らした安舒已に対し、鳳は「大東亜聖戦時に、わたしたち国民はできるだけ節約し、貯蓄し、聖戦を支援しなければならない」と悟らせる。普通の会話のはずなのに、強引に時局と合致する内容が盛り込まれる。しまいに、鳳は安舒已との不倫を懺悔し、自分の行動を改める証として、これまでに貯蓄した全財産を引き出し、国防に献金したり、増産女戦士になるために、畑を購入資金に充てるのである。

柳憶の『勝利の微笑』は両親を亡くした姉弟の話である。女子校で教師をしている姉松影は医大に通っている弟の学費を稼いでいる。だが、自慢の弟は資産家の令嬢に付きまとわれて、学業に専念できない。彼女は弟の行為は国家に申し訳ないと言い、決戦という非常時に青年は墮落な行為をしてはいけないと泣ながらに弟に訴えた。弟の目を覚ますために、「国兵志願軍」に申し込んでやった。弟は男のなすべきことがとうとう分かり、改心した。資産家令嬢も感化され、化粧代を国防に貢ぎ、女子勤労奉公隊の小隊長になったという典型的な国策小説だった。

これまで女性作家はなるべく政治領域に足を踏み入れずに身の出来事から、日常に於いて、女性の趣味や関心事を書いてきた。当然読み応えのある作品もあり、彼女たちの時代に対する要求や心からの叫びがしっかりと聞こえてきた。戦争の終焉間近になると、とりわけ日本の傀儡である「満洲国」も友邦と足並みを揃えることが強制させられることは当然であろう。国を挙げての「大東亜戦争」完遂キャンペーンは子供も女性も逃れることもできず、巻き込んでしまう。女性の新人作家をこのような場で書かせることは国策宣伝を請け負った雑誌『麒麟』にとって、大義名分上から辞退できない重要な任務だったと言える。

さらに、若くて文壇に頭角を現している彼女たちを登板させることが、

一般の主婦をはじめ、社会活動に参加していない裕福層の婦人やお嬢様、女子学生に絶大な効果が期待されたにちがいない。実際に彼女たちの題材を究明してみても、小説の狙いを垣間見ることができた。

おわりに

『麒麟』はついに第五巻第二期（二〇〇六年復刻版の最終号）をもって、終焉を迎えた。終刊の挨拶もなければ、読者へのメッセージもない。恐らく編集部は次号を準備し、発刊するつもりでいたのだろう。創刊号は各界の大物の祝辞を並べながら、内容を盛りだくさんにした始まりと比較して、終わりはあつけないものだった。戦局は刻々と緊迫しており、雑誌の刊行を継続する余裕と資金を捻出することは困難になってきていたはずである。この数ヶ月後に「満洲国」が日本の敗戦に伴って崩壊してしまうことを、果たして編集者は予期していただろうか。

雑誌『麒麟』は足かけ五年間存続していた。これだけ長く存続していた雑誌は「満洲国」では「長寿」といえよう。雑誌は大衆雑誌として、一般人の趣味を汲み取りながら、風雅な一面をとるときも覗かせていた。女性ライター陣を見ても雑誌の特徴がにじみ出ている。呉瑛、梅娘、但姉のような文壇における一定の地位のある作家もいれば、楊絮のような大衆に好かれる多芸多才な作家もいる。さらに、たくさんの新人を登場させ、女性読者により多くの話題を提供させた。雑誌は当初「四千万人の民衆が情操を培うために発行したもの」と高い目標を掲げていた。女性重視という側面のみでいえば、結果的に庶民層の一部の女性読者を獲得し、彼女たちの日常を豊富にし、発刊の辞の通り「精神が慰められ、情操が向上」した目的を果たしたのではないかと推測する。

多くの女性が雑誌『麒麟』に参加したことは意味深い。女性の社会進

出がまだ始まったばかりの時代に、雑誌からまず識字層の女性たちにメッセージを送る手法は進歩的と言わざるを得ないだろう。とりわけ、五・四運動後の荒波と淪陷という悲しい現実の前に、東北の知識階級の女性たちは男性と同じように筆を取り、自分たちの声を挙げたのである。たとえ彼女たちの声はか弱かったとしても、それなりに社会に流布したはずであろう。宿将の呉瑛は文学に身を投じるよう、女性文学愛好家たちにもこう呼びかけた。

われわれは満洲の新文学の頁をめくってみると、顕著なことが一つあることに気付く。つまり女性の文芸作品が奮闘した一頁を担っていることである。(中略)女性の文筆活動は継続性がないと従来から言われてきた。この点について、目の前の事実から、私たちは認める。しかし、私は仮に文学生活を送れないにしても、新文芸の声を高く鳴らすことを熱烈に期待したい。情熱が失われた書く力のある女性文学者に筆の力をもう一度絞り出してもらいたい。少なくとも私たちは架空化された空想家にはならない。共に文学を積極的に始めようじゃないか。^①

これまでに『麒麟』は低俗な漢奸雑誌として、ほとんど日の目を見ることがなかった。取り上げられるようになったのはごく最近のことではなからうか。政治的な理由で雑誌に投稿したことのある作家は創作の事実を必死に隠そうとしていた。淪陷区における女性作家と大衆文学との関わりを論じることは常にレールに外れる恐れがあるかのように見られた。

淪陷という史実は中国の現代においては、大変特殊な時代だった。特に女性たちは多くの制約を受けることが多かった。東北淪陷区の女性作

家にとっては、彼女たちの作品はそれぞれの素養と実生活から積み重ねてきた結果である。そして、言論が統制された時代においては、露骨に反抗精神と民族矛盾を暴露することは極めて難しかった。

『麒麟』の看板ライターの楊絮はかつて自分の気持ちをこう言っていた。「私は時代背景のある有意義な小説なんか絶対書かない。私は随筆や散文を書くのが好きだ。これら随筆や散文は実はすべて私自身のことを書いていた」^②。楊絮の考え方はけっして彼女だけの行動座右銘ではなく、『麒麟』に登場した多くの女性作家も彼女と同じ処世術を取らざるを得ないことは良識ある現代人ならば誰にでも分かる事実だろう。これらの作品には多く出てくるのが永久性を帯びた無難な話題である。例えば婚姻、家庭、男女、色情、または自己の身边に発生した些細な出来事などである。国土が喪失、異民族に侵略された時期には相応しくない題材だろう。しかし、彼女たちの作品からたまに「弦外の音」が聞こえている。つまり、言葉の裏に意味があるのだ。作品の登場人物や時代背景及び複雑なストーリーの展開はあくまでも「満洲国」内に限定していた。今日の我々にその時代を透視する絶好の史料を残してくれたと思うずにはいられない。

淪陷時期の東北文壇が多くの女性作家の参与によって、多彩になったことはすでに検証済みである。どのような形で表現したにしても、彼女たちの文学は東北淪陷区の文学の一頁として記憶される価値はあるであろう。

注

- ① 一九一〇年代の中国で起こった文化運動を指す。代表人物は陳独秀、魯迅、胡適、李大釗、呉虞、周作人などがある。彼らは儒教に代表される旧道徳、旧文化を打破し、人道的で進歩的な新文化を樹立しようとい

うことを提唱し、若い知識層に圧倒的な支持を受けた。さらに、儒教批判、人道主義、文字改革、文学改革もこの運動の核心と言えよう。

- ② 中華民国初期から五四運動時期にかけて活躍した通俗文学のグループ。才子佳人の恋愛物語が多かったので、魯迅から「佳人才子に恋をして、別れ難い思いで、柳の影や花の下にいて、まるで一対の蝴蝶か鴛鴦のようだ」と評されたことから「鴛鴦蝴蝶派」と称せられるようになったという。上海で『小説叢報』（一九一四年—一九一八年）、『小説新報』（一九一五年—一九二二年）などの雑誌を刊行し、小市民的趣味に迎合した、とされる。一九一四年から一九二三年にかけて発行した週刊『礼拜六』は影響力が強く、それによって「礼拜六派」とも呼ばれる（『オンライン現代中国作家辞典』より）。

- ③ 範伯群・孔慶東主編『通俗文学十五講』（北京大学出版社・二〇〇五年）、七—一一頁参照。

- ④ 「芸文指導要綱」は一九四一年三月二三日に「満洲国」弘報処によって公布された。政府の文芸政策が示された規定である。

- ⑤ 呉瑛「満洲女性文学のひとと作品」（『淪陷区中国文学研究資料総匯』黒

竜江人民出版社・二〇〇七年）、一三〇頁。

- ⑥ 同③、一〇三頁。

- ⑦ 呉瑛「満系女流文学を語る」（福田清人著『女作家作品選』小学館・昭和一七年、所収）、一八三頁。

- ⑧ 顧盈「呉瑛論」（陳因著『満洲作家論集』実業印書館・一九四三年、所収）、一九四—一九五頁。

- ⑨ 呉瑛「満洲の女性文壇」（『新満洲文学資料』開明書店・発行年未詳）、八五頁。

- ⑩ 張毓茂主編『東北現代文学大系・評論系』（瀋陽出版社・一九九六年）、三四九頁。

〔付記〕

本論文のなかで使用した雑誌『麒麟』は全国図書館文献縮微複製中心（二〇〇六年七月）より復刻されたものである。計一三冊、四四期、総頁数は六七八八頁である。

（大谷大学准教授）